

カービュー マーケットウォッチ (2012年11月)

自動車総合サイト「carview.co.jp」を運営する株式会社カービュー(本社:東京都中央区、代表取締役社長:金子 昭一)は、社団法人 日本自動車販売協会連合会が公表する「月間登録台数ランキング」をもとに、日本国内における自動車マーケットの動きを独自分析する。

補助金終了の反動で6.7%減と2カ月連続のマイナス

12年 10月順位	12年 9月順位	動向	モデル名	メーカー名	台数
1	(1)	→	アクア	トヨタ	24,192
2	(2)	→	プリウス	トヨタ	18,116
3	(-)	↑	ノート	日産	10,007
4	(3)	↓	フィット	ホンダ	9,318
5	(4)	↓	スペイド	トヨタ	6,180
6	(16)	↑	カロラ	トヨタ	5,973
7	(7)	→	ヴィッツ	トヨタ	5,359
8	(6)	↓	インプレッサ	スバル	5,200
9	(5)	↓	セレナ	日産	4,970
10	(12)	↑	フリード	ホンダ	4,591
11	(9)	↓	ポルテ	トヨタ	3,648
12	(8)	↓	ステップワゴン	ホンダ	3,465
13	(10)	↓	ヴェルファイア	トヨタ	3,169
14	(-)	↑	86	トヨタ	3,152
15	(11)	↓	ミラージュ	三菱	3,054
16	(13)	↓	CX-5	マツダ	2,794
17	(15)	↓	パッソ	トヨタ	2,720
18	(14)	↓	キューブ	日産	2,656
19	(19)	→	デミオ	マツダ	2,651
20	(17)	↓	ヴォクシー	トヨタ	2,576

※ 社団法人 日本自動車販売協会連合会調べ

※ 輸入車および軽自動車を除く

カービュー編集部独自の分析

■補助金終了の反動で 6.7%減と 2 カ月連続のマイナス

海外メーカー製輸入乗用車は 10.7%増と好調をキープ

今回は、日本自動車販売協会連合会（自販連）、全国軽自動車協会連合会（全軽自協）、日本自動車輸入組合（JAIA）が発表した 10 月の販売データからマーケット概況をチェックしていこう。まず輸入車、軽自動車を含め、国内で販売された乗用車総数は 29 万 9334 台で、前年同月比は 93.3%（貨物車、バスを含む新車総販売数は 35 万 9333 台、前年同月比 94.3%）と 2 カ月連続で前年を下回った。不安視されていたエコカー補助金終了による反動減が顕著化した形だが、今年と同様に 9 月に新車購入補助金が終了し、大きく落ち込んだ 10 年 10 月と比べると、前年同月比はひとケタ台（10 年 10 月の前年同月比は 74.1%）にとどまり、10 年 10 月比でも 19%増と、影響が軽微であることをうかがわせる。すでに年間累計で 21 万台を突破し、10 月単月で乗用車トップとなった「トヨタ アクア」をはじめ、「日産 ノート」や「トヨタ スペイド」といったニューモデルが好調な売れ行きを堅持したことで、底堅い市場状況になっているようだ。

輸入車と軽乗用車を除く 3/5 ナンバーの国産乗用車（日産マーチ 1959 台、日産ラティオ 1192 台、三菱ミラージュ 3054 台含む）は 18 万 562 台で、前年同月比は 87.9%。メーカーブランド合計では「インプレッサ」が好調なスバル、「ミラージュ」が牽引役となった三菱以外は前年を下回り、それもトヨタと日産を除き、2 ケタの大幅なマイナスだ。月間ランキングでは、アクアが 2 万 4192 台で 16 カ月連続トップを続けていた「プリウス（α、PHV 含む）」を抜き初のトップ。アクアは軽乗用車を含めた乗用車全体でも初のトップとなった。2 位はプリウス、3、4 位は前月同様、日産ノートと「ホンダ フィット（シャトル含む）」、5 位にトヨタ スペイドが前月 11 位からジャンプアップと、ニューモデル勢が 1、3、5 位を占めた。ただプリウス、フィットが前年同月比 61.1%、41.7%と大きく落ち込んでおり、このあたりが市場復調のカギになるはずだ。

軽自動車は乗用車部門が 10 万 2868 台／前年同月比 102.3%（貨物車を含めた全体は 13 万 3790 台／前年同月比 100.5%）で、13 カ月連続プラス。車名別では「ホンダ N BOX（+含む）」が 1 万 8203 台でトップを奪還。「スズキ ワゴン R」は 1 万 5946 台で 2 位に後退となった。

輸入乗用車は海外メーカー製のみでは 1 万 5455 台、前年同月比は 110.7%（日本メーカー製を含む輸入乗用車全体では 2 万 2108 台、同 121.0%）で 6 カ月連続で前年を上回った。海外メーカーブランド別乗用車ランキングは VW（フォルクスワーゲン）が 4063 台でトップを奪還、2 位は 2662 台の BMW（ミニを除く）で、前月トップに立ったメルセデス・ベンツは 2359 台で 3 位に後退。ただ前年同月比は VW5.2%増、BMW20.2%増を上回る 33.2%増と好調をキープしている。

■ココも気になる！ その1

N BOX のヒットで国内 2 位を射程内としたホンダの次の一手は？

昨年は年間販売台数で日産に抜かれ、3 位に甘んじたホンダだが、昨年 12 月に投入した「N BOX」が大ヒット。1~10 月累計で 18 万 1103 台（+含む）と「スズキ ワゴン R」を上回り、トップをいく「ダイハツ ミラ（イース、ココア含む）」の 18 万 9888 台に迫る勢いだ。これで貨物車を含む全新車販売台数の 1~10 月累計が 65 万 257 台／前年同期比 54.4%増となり、ライバル日産に 7 万 6931 台の差をつけ、2 位を快走。ほぼ年間 2 位の座を手中に収めた。

主戦場となる乗用車に限っても、3 ナンバー普通車／5 ナンバー小型車の合計では 38 万 5277 台で、日産との差は輸入車扱いの「マーチ」、「ラティオ」を含めても 4000 台弱の差だが、軽乗用車を加えると、一気に 13 万台強の大差になる。いかに N BOX がホンダ復調の牽引役となっているのかがわかるだろう。

そんなホンダは 11 月にプレミアム軽をアピールする「N ONE」を投入。N ONE の月間販売目標は 1 万台だが、発売前の 10 月末時点で 9000 台超の事前予約を受けつけており、ますますホンダの軽が存在感を増しそうな勢いだ。

ただ軽乗用車は 1.5 リッター以下のコンパクトカーと競合するのも事実。これまでホンダの屋台骨を支えてきたフィットが 10 月は前年同月比 58.3%減の 9318 台にとどまったのも、N シリーズの好調さと無縁ではないはずだ。そこでホンダが打った次の一手が新開発のハイブリッドシステム。先日、クルマの特性に合わせた 3 つの新しいハイブリッドシステムを公開したが、コンパクトクラスに最適とした 1 モータータイプは来年モデルチェンジ予定のフィットに搭載される見通し。すでにホンダは新車販売に占めるハイブリッド車（HV）比率が 44%と高いだけに、次期フィットとともに、新ハイブリッドシステムの出来がさらなる飛躍のカギになりそうだ。

■ココも気になる！ その2

up!の投入で勢いに乗る VW に注目

12年連続輸入車ブランド年間販売台数 No.1 を続けている VW が波に乗っている。10月は4063台と、7年ぶりに4000台を突破し、1~10月累計では4万6033台／前年同期比11.9%増と、昨年間で5万631台／同8.4%増だった勢いをそのままキープしている。

その推進力となったのが10月1日に発売された「up! (アップ!)」だ。全長3545mm×全幅1650mmのコンパクトサイズながら、ポップな雰囲気あふれるエクステリアとシティエマージェンシーブレーキ（低速域追突回避・軽減ブレーキ）といった充実の安全装備を搭載し、149万円からというリーズナブルな価格設定を実現したup!は、発売後約4週間で約4000台を受注。デビュー月の10月は1599台と、海外メーカー製輸入乗用車モデル別販売台数で月間トップを獲得。納車さえ順調に進めば、台数はまだまだ伸びる見込みだけに、今後の売れ行きに要注目だ。

VWは今年には年間6万台が目標で、18年までに11万台を目指すという。その最初の一步がアジアで初めて投入されたup!というわけだが、来年には日本でも人気が高まりつつあるディーゼル車を投入。また夏頃には今年9月にヨーロッパで発表された新型「ゴルフ」を導入予定と、拡販に向けて着々と手を打っている。さらに、こうしたニューモデルを軌道に乗せるために、現在約250店のVW販売店を3割増しの330店程度に拡大する計画もあるというから販売戦略も盤石といえるはずだ。

すでに今年には「ティグアン R-Line」を皮切りに、「ポロ TSI コンフォートライン ブルーモーションテクノロジー」、新型「ザ・ビートル」、「パサートオールトラック」、新型「CC」などニューモデルを続々投入。そして11月20日から販売される「クロストゥーラン」や11月に装備変更を受けた「ポロ GTI」など、次々とテコ入れ策を打っている。国内乗用車市場の先行きが不透明ななか、VWの展開力に期待大だ。

上記プレスリリースに関するお問い合わせ先

株式会社カービュー 総務部 広報チーム (pr@carview.co.jp)

tel : 03-5859-6158 fax : 03-5859-6180
